

新型コロナパンデミックの 子どもたちへの影響

馬場 直子

日々の皮膚科外来診察の中で、COVID-19の流行により子どもたちがさまざまな身体的、精神的影響を受けていると実感することが多々ある。

身体的には頻繁な手洗いと消毒の励行による手荒れ、そしてマスクの装着による顔の接触皮膚炎(いわゆるマスク皮膚炎)である。一方、密を避ける生活を強いられたことにより、従来は夏場に多かったとびひ、水いぼ、手足口病などの感染症が2020年、2021年の夏は激減した。従来、手足口病の流行のピークは7～8月が多く、2011～2019年まで隔年ごとに奇数年に大流行していた。2020年はコロナがなくても少ないことが予想される偶数年ではあったが、それにしても過去10年間で最低の患者数であった。2021年は大流行するはずの奇数年であったが、実際には夏でもほとんど流行はみられず、緊急事態宣言が解除された後、10月になってから急に増え始めるという異例の現象がみられ、12月現在も続いている。

精神的な要因が強いものとして、抜毛症や脱毛症、爪噛みなどがあげられる。これらは長期の休校により増加した不登校やいじめなどをきっかけに生じた子が多い。

COVID-19の感染拡大によってもたらされた社会の大きな変化はもう2年になろうとしている。私たち大人にとっての2年と子どもにとっての2年は重みがずいぶん違う。年齢を重ねるほど月日が経つのは早く感じられるが、子どもにとっての2年はこれまでの人生に占める割合が大人の数倍である。また小さい子ほどその期間に、本来であればさまざまなことを経験して学び成長する貴重な時期だったはずであり、失われた時間は取り戻すことができない。ヒトの最初の1年間は生涯でもっとも劇的に脳や身体が成長発達する時期であり、その後はその伸び率は次第に減ってくる。つまり小さい子どもほど、同じ期間でも大きな重みがあるわけである。この大切な時期に、さまざまな触れ合いや学びの機会が制限されてしまった。また保育園に預けられている乳児は、一日中マスクで顔のほとんどの表情を隠された保育士さんによって育児をされるわけであるが、それでは人の表情が読み取れなくなってしまうであろう。乳幼児は一心に大人の顔色を伺いながらその表情を読み取ろうとし、まさに空気を読んでいるわけだがその能力を培う機会を逸してしまうことになる。それによってもたらされる損失は計り知れず、後で取り返せるものではないと思う。

そう考えるとコロナ禍によって生涯に関わる大きな損害を受けた一番の被害者は、子どもたちなのではないだろうか？ 子どもが感染しても軽症で済むからといって安心してはいられない。以前のようにマスクなしでも子ども同士でくっつき合ったりふざけ合ったりする貴重なスキンシップが図れる日常生活が、一日も早く戻ってくることを願うばかりである。